

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14359

研究課題名(和文) 心理的Entitlementに着目したモラルライセンシング生起モデルの提案と検証

研究課題名(英文) Investigating and proposal of occurrence of moral licensing effect focused on psychological entitlement

研究代表者

古川 善也 (Furukawa, Yoshiya)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・助教

研究者番号：50826477

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、モラルライセンシング効果に着目し、先行の道徳行動が後の不道徳を促進する「ライセンス」となるか、あるいは更なる道徳行動を引き起こす一貫性をもたらすか、その分岐のプロセスを説明するために、1つの媒介要因(心理的Entitlement)と2つの調整要因(制御焦点と価値)から成る仮説モデルを提案・検証することであった。質問紙調査やオンライン実験を実施した結果、特性レベルでの道徳行動の蓄積の多寡が自身の行動に権利と正当性を高めて、結果として不道徳行動を起こしやすくしてしまう関係でのモラルライセンシング効果が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果からは、先行の道徳行動が後の不道徳を促進する「ライセンス」となるか、あるいは更なる道徳行動を引き起こす一貫性をもたらすかの分岐となる境界条件を明らかにすることが出来なかった。しかしながら、様々に指摘されているモラルライセンシング効果の境界条件について実証的検討を行ったことに一定の意義がある。近年の研究においてモラルライセンシング効果において文化差による影響や他者の存在による影響の重要性が指摘されており、今後においてどのような要因を検討すべきかの道筋が示されている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to focus on the moral licensing effect and test a proposed hypothetical model consisting of one mediator (psychological Entitlement) and two moderators (regulatory focus and personal value) to explain the divergent processes that moral licensing or moral reinforcement. Questionnaire surveys and online experiments were conducted, suggesting a moral licensing effect in the process that the accumulation of moral behavioral experience at the trait level, which increases psychological entitlement and, consequently, makes one more likely to engage in immoral behavior.

研究分野：社会心理学

キーワード：モラルライセンシング 道徳 道徳アイデンティティ 向社会性 制御焦点

## 1. 研究開始当初の背景

道徳は対人関係や社会集団を維持し、秩序をもたらす重要な要素であり、個人・組織の道徳行動が安定的で、恒久的となるような道徳教育、経営倫理教育が望まれる。しかしながら、このように社会・教育政策として道徳行動を推進したとしても、必ずしも人の道徳性を育み、不道徳行動の抑制に繋がるわけではない。道徳行動の実行は時として逆に不道徳行動を促進してしまうことさえある(モラルライセンシング効果<sup>1)</sup>)。本研究の目的は、モラルライセンシング効果に着目し、先行の道徳行動が後の不道徳を促進する「ライセンス」となるか、あるいは更なる道徳行動を引き起こす一貫性をもたらすか、その分岐のプロセスを説明するために、1つの媒介要因(心理的 Entitlement)と2つの調整要因(制御焦点と価値)から成る仮説モデルを提案・検証することである。このモデルでは以下で示す過程で道徳行動の実行が後の不道徳を引き起こすと想定している。心理的 Entitlement とは「自身の行動に権利と正当性が付与される感覚」であり<sup>2</sup>、自己価値を反映し強まる。道徳的であることは自己価値を規定するため<sup>3</sup>、道徳行動の実行は Entitlement を強める。制御焦点とは、行動制御の志向性であり、促進焦点と予防焦点に分けられる<sup>4</sup>。促進焦点が優勢時、道徳行動は望ましい状態の達成を意味し、自己価値に反映され Entitlement を強める。予防焦点が優勢時、道徳行動は望ましくない状態の回避を意味し、道徳行動は自己価値の向上に反映されない。価値については、道徳性(道徳アイデンティティ<sup>5</sup>)と向社会性(社会的価値志向性<sup>6</sup>)に着目する。これらの要因が強い場合には、Entitlement が不道徳行動を許容させるプロセスに干渉し、不道徳行動の生起を抑制する。

## 2. 研究の目的

モラルライセンシング効果のプロセスに関する上記のモデルを検証するために、本研究では次の三つの目的を設定した。

【研究 1】心理的 Entitlement の媒介効果を検証する。道徳行動は Entitlement が高め、不道徳行動(研究 1-A)や功利的判断(研究 1-B)を生起しやすくさせるか検証する。

【研究 2】制御焦点による調整効果(ライセンス獲得段階)を検証する。

【研究 3】個人の価値による調整効果(ライセンス行使段階)を検証する。Entitlement の不道徳行動への影響を道徳性(研究 3-A)、向社会性(研究 3-B)の強さが抑制するか検証する。

## 3. 研究の方法

本研究では、心理尺度での測定による特性レベルでの道徳的経験による影響と実験的な操作による道徳的経験による影響の2つのアプローチによる検討を採用した。特性レベルでの道徳的経験による影響の検討については、研究 1-A、および研究 3-A において、道徳アイデンティティの象徴化(特性レベルでの道徳行動の蓄積の多寡)が心理的 Entitlement を媒介して、不道徳行動を促進するか、また道徳アイデンティティの内在化による調整効果を検証するために質問紙調査を実施した。実験的な操作による道徳的経験による影響については研究 1-B、研究 2、研究 3-B で実施した。研究 1-B ではトロッコ問題などの多くの研究で用いられている道徳ジレンマのシナリオを用いて、モラルライセンシングの操作が心理的 Entitlement を介して道徳的に判断を迷う場面での意思決定を容易にするかを検討した。研究 2、研究 3-B では制御焦点、向社会性の調整効果を検討する研究を実施した。モラルライセンシングの条件操作については参加者に過去の道徳行動の経験を思い出すことによる方法、または実験課題として他者に貢献する向社会的行動の経験をさせる方法で実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 心理的 Entitlement の媒介効果の検証

研究 1-A では4年制大学の大学生 113 名を対象に、講義後の時間を用いて質問紙調査を実施した。この研究では、普段の道徳行動に対する在り方について道徳アイデンティティ尺度<sup>5</sup>を用いて測定した。心理的 Entitlement は日本語版心理的特権意識尺度<sup>7</sup>を用いて測定した。また「飲食店のアルバイト先で商品を無断でつまみ食いをするだろうか」などのシナリオ項目で不道徳行動を尋ねた。

道徳アイデンティティ尺度の2つの因子(内在化と象徴化)から心理的 Entitlement を介して不道徳行動を促進する過程のモデルについて分析を行ったところ、RMSEA がやや不良であるものの、ある程度のモデルの妥当性が確認された( $\chi^2(3) = 10.535, p = .015, CFI = .943, RMSEA = .116, SRMR = .063$ )。モデルからは象徴化の道徳アイデンティティが高いほど、心理的 Entitlement も高まり、不道徳行動も増加させることが示された。つまり、特性レベルでは道徳行動を重視している程、自己の正当性が強化され、不道徳行動が容易になることが示唆される。

研究 1-B ではクラウドソーシングサービスの登録者 333 名を対象にオンライン実験を実施した。実験手続きを最後まで遂行していない参加者や遂行時間の極端に長い参加者は除外した。モラルライセンシングの操作として、参加者に過去の経験を思い出し、記述する課題を行うよう

求めた。ライセンス条件では道徳行動のエピソードを思い出して記述するよう求めた。統制条件では日常的な場面として普段どのように平日を過ごしているかを思い出して記述するよう求めた。次に、道徳ジレンマ課題を行った。この課題では、数名の人物に危険が差し迫っている場面において、そのままでは被害にあわない 1 人を犠牲にすることで被害を少なくする選択肢が参加者には提示され、参加者には介入しないか(義務論的選択)、1 人を犠牲にするか(功利的選択)のいずれかを選択するよう求めた。心理的 Entitlement については日本語版心理的特権意識尺度<sup>7</sup>から 1 つの項目(「私は他の人よりも特別な扱いを受けて当然だというのが正直な気持ちだ」)を尋ねた。

道徳ジレンマについては 6 つのシナリオを用いたが、信頼性を確認したところ、低い値であったため、シナリオごとに分析を行った。モラルライセンシングの操作が心理的 Entitlement を介して道徳ジレンマ課題での功利的選択を容易にするかを検討するために、ロジスティック回帰による媒介分析を行った。その結果、いずれの道徳ジレンマのシナリオに対してもモラルライセンシングの操作から心理的 Entitlement を介しての有意な媒介効果は認められなかった( $p > .10$ )。

## (2) 制御焦点による調整効果(ライセンス獲得段階)の検証

研究 2 ではクラウドソーシングサービスの登録者 255 名を対象にオンライン実験を実施した。実験手続きを最後にまで遂行していない参加者や遂行時間の極端に長い参加者は除外した。研究 1-B と同様に、モラルライセンシングの操作として、参加者に過去の経験を思い出し、記述する課題を行うよう求めた。また、心理的 Entitlement についても 1 項目で測定した。制御焦点については促進予防焦点尺度邦訳版<sup>8</sup>を用いて測定を行った。また、モラルライセンシングの影響を検討する行動指標として向社会的努力課題<sup>9</sup>を参加者に行うよう求めた。この課題では計算と記憶を同時に行うことが求められるものであり、正解率に応じて報酬が受け取れるかが決定する。課題の試行によって報酬の受け手が自分自身が、慈善団体かのいずれかに変わる。この課題では高報酬高リスクの選択をする事も出来、他者(慈善団体)のためにリスクを負う選択をしている程度を向社会的行動の指標として測定した。

道徳行動の経験による影響が心理的 Entitlement を高める際に、制御焦点による調整効果が生じるかを検討するために、制御焦点の下位因子である促進焦点と予防焦点のそれぞれを調整変数として、モラルライセンシングの操作を説明変数、心理的 Entitlement を目的変数として交互作用項を含む重回帰分析を行った。その結果、促進焦点と予防焦点のいずれについても、心理的 Entitlement に対するモラルライセンシングの操作との有意な交互作用効果は認められなかった(促進焦点: interaction effect = .080,  $p = .201$ , 予防焦点: interaction effect = .007,  $p = .915$ )。また、向社会的努力課題で測定した向社会的行動に対するモラルライセンシングの操作の影響については、道徳行動の経験を想起した条件の方がより向社会的行動が生じやすいというモラルライセンシングとは逆の効果が認められた( $d = 0.29$ ,  $t = 2.34$ ,  $p = .020$ )。

## (3) 個人の価値による調整効果(ライセンス行使段階)の検証

研究 3-A では研究 1-A で測定したデータを用いて、心理的 Entitlement から不道徳行動への影響に対して道徳性が調整するかどうかについて分析を行った。道徳アイデンティティ尺度の下位因子である内在化を調整変数として、心理的 Entitlement を説明変数、不道徳行動を目的変数として交互作用項を含む重回帰分析を行った。その結果、研究 1-A と同様に、不道徳行動に対する心理的 Entitlement の有意な負の影響は認められたものの( $\beta = .192$ ,  $p = .011$ )、道徳アイデンティティの内在化と心理的 Entitlement の交互作用項については有意な影響は認められなかった(interaction effect =  $-.106$ ,  $p = .236$ )。

研究 3-B ではクラウドソーシングサービスの登録者 257 名を対象にオンライン実験を実施した。実験手続きを最後にまで遂行していない参加者や遂行時間の極端に長い参加者は除外した。モラルライセンシングの操作として、研究 2 で使用した向社会的努力課題を用いた。この課題において、計算・記憶課題でのパフォーマンスが他者(慈善事業)の利益のためにもあるのか、自分自身だけの利益となるのかによって道徳行動の経験を操作した。心理的 Entitlement については 1 項目で測定した。向社会性については社会的価値志向性のスライダー尺度<sup>6</sup>を用いて測定を行った。モラルライセンシングの影響を検討する行動指標としてマインドゲーム課題<sup>10</sup>を実施した。この課題ではさいころの目を事前に予測し、実際に出た目と一致しているかを報告して、一致していれば報酬が獲得できる。参加者は容易に虚偽報告を行って報酬を得ることができる。実際に不正していたかは確認できないが、全体的に一致報告が多ければ、それは不正を間接的に示すことになる。したがって一致報告の数を不正行動の指標とした。

社会的価値志向性のスライダー尺度によって測定した向社会性を調整変数として、心理的 Entitlement を説明変数、不正行動を目的変数として交互作用項を含む重回帰分析を行った。その結果、向社会性と心理的 Entitlement の交互作用項については有意な影響は認められなかった(interaction effect = .112,  $p = .103$ )。また、マインドゲーム課題で測定した不正行動に対するモラルライセンシングの操作の影響については、他者の利益のために努力することが含まれた場合の方がその後の不正行動は起こりにくいというモラルライセンシングとは逆の効果が認められた( $d = 0.28$ ,  $t = 2.26$ ,  $p = .025$ )。

本研究において特性レベルでの道徳行動の蓄積の多寡が自身の行動に権利と正当性を高めて、結果として不道徳行動を起こしやすくしてしまう関係でのモラルライセンシング効果が示唆された。しかしながら、実験的手法を用いた研究においては本研究で想定していたモデルによる過程(心理的 Entitlement による媒介効果, 制御焦点や道徳性, 向社会性による調整効果)は支持されなかった。また, モラルライセンシングの操作による行動指標(向社会的行動や不正行動)に対してモラルライセンシング効果は認められず, むしろ逆方向での有意な影響が認められた。モラルライセンシングの効果については文化差が指摘されており<sup>11</sup>, また近年の研究では他者の存在の有無による境界条件も指摘されている<sup>12</sup>。モラルライセンシング効果の存在が頑健に認められるものであるかも含めて今後さらなる検討が必要であると考えられる。

## 5 . 引用文献

1. Miller, D. T., & Effron, D. A. (2010). Psychological license: When it is needed and how it functions. *Advances in Experimental Social Psychology*, 43, 115-155. [https://doi.org/10.1016/S0065-2601\(10\)43003-8](https://doi.org/10.1016/S0065-2601(10)43003-8)
2. Campbell, W. K., Bonacci, A. M., Shelton, J., Exline, J. J., & Bushman, B. J. (2004). Psychological entitlement: Interpersonal consequences and validation of a self-report measure. *Journal of Personality Assessment*, 83(1), 29-45. [https://doi.org/10.1207/s15327752jpa8301\\_04](https://doi.org/10.1207/s15327752jpa8301_04)
3. Dunning, D. (2007). Self-image motives and consumer behavior: How sacrosanct self-beliefs sway preferences in the marketplace. *Journal of Consumer Psychology*, 17(4), 237-249. [https://doi.org/10.1016/S1057-7408\(07\)70033-5](https://doi.org/10.1016/S1057-7408(07)70033-5)
4. Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 1-46. [https://doi.org/10.1016/S0065-2601\(08\)60381-0](https://doi.org/10.1016/S0065-2601(08)60381-0)
5. Aquino, K., & Reed II, A. (2002). The self-importance of moral identity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83(6), 1423-1440. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.83.6.1423>
6. Murphy, R. O., Ackermann, K. A., & Handgraaf, M. J. (2011). Measuring social value orientation. *Judgment and Decision Making*, 6(8), 771-781. <https://doi.org/10.1017/S1930297500004204>
7. 下司忠大・小塩真司 (2016). 特権意識の構造と特徴—3 つの特権意識に注目して—パーソナリティ研究, 24(3), 179-189. <https://doi.org/10.2132/personality.24.179>
8. 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討— 心理学研究, 82(5), 450-458. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.82.450>
9. Depow, G. J., Lin, H., & Inzlicht, M. (2022). Cognitive effort for self, strangers, and charities. *Scientific Reports*, 12(1), 1-11. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-19163-y>
10. Kajackaite, A., & Gneezy, U. (2017). Incentives and cheating. *Games and Economic Behavior*, 102, 433-444. <https://doi.org/10.1016/j.geb.2017.01.015>
11. Simbrunner, P., & Schlegelmilch, B. B. (2017). Moral licensing: A culture-moderated meta-analysis. *Management Review Quarterly*, 67, 201-225. <https://doi.org/10.1007/s11301-017-0128-0>
12. Rotella, A., Jung, J., Chinn, C., & Barclay, P. (2023). Observation moderates the moral licensing effect: A meta-analytic test of interpersonal and intrapsychic mechanisms.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Furukawa, Y., Nakashima, K., & Morinaga, M.	4. 巻 -
2. 論文標題 Does victim forgiveness relieve perpetrator guilt? Examining null effects with equivalence tests and Bayes factor	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-021-01805-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 古川善也
2. 発表標題 道徳ジレンマにおけるモラルライセンシング効果の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川善也
2. 発表標題 VR 空間におけるネガティブ感情の経験についての検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第29回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川善也
2. 発表標題 Investigating the experience of negative emotions in VR space
3. 学会等名 2022 SAS Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古川善也
2. 発表標題 不道徳行動へのモラルライセンシング効果における行為主体の影響の検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第28回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古川善也・藤 翔平・杉村伸一郎
2. 発表標題 幼児におけるモラルライセンシング効果の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古川善也・藤 翔平・杉村伸一郎
2. 発表標題 幼児におけるモラルライセンシング効果の検討2：推測ゲームにおける不正行為に対する影響
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古川善也・塚脇涼太・中島健一郎
2. 発表標題 道徳不活性化（Moral disengagement）尺度日本語版の作成と妥当性の検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古川善也
2. 発表標題 道徳判断に対するモラルライセンシング効果の影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------